

仏母寺の歴史

仏母寺の名前が初めて見られるのは永禄 12 年（1569）で、大野市の宝慶寺文書の「仏母寺納帳」に、横枕・御給村に 8.56（実際は 6.66）石の院領を所持していることが記されている。しかしその所在地は明確ではない。『片瀬誌』には小山村下舌に創建とあるが、諸種の史料から総合的に判断すると、宝慶寺から離れ下舌村に仏母院として独立したのは元禄 9 年（1696）で、その開山は宝慶寺 28 世雲波和尚である。

片瀬村に移った経緯は以下のものであった。大師山の中腹に大師堂があり泰澄自作の像も安置されていた。しかし村から離れており治安もよくなかったため、宝永 2 年（1705）村では藩に願い出て庵を建てる許可を得た。下舌村から片瀬に移された史料そのものは残っていないが、この庵が仏母院で庵主を来雄和尚に依頼する史料が残る。

当寺の本尊延命地藏については地藏を納めた厨子に享保 12 年（1727）と記されている。正式な寺号を得たわけではないが 18 世紀初期には寺としてしての体裁が整い、中期には 8 石近い寺領や山林も所持するにいたる。かつては百数十点の仏母寺文書が残されており、その一つに宝暦 4 年（1754）の「太子堂再建奉加帳」があった。この年の 7 月 16 日に供養を行うので参詣をと呼びかけている。その後、天明年間（1781～89）に 35 世恵珍和尚の代に本堂が再建され五百羅漢も安置された。

正式に寺号を得るのは明治 39 年（1906）で、宝慶寺を本山とするとの条件で仏母寺の寺号を獲得した。境内には勝山を代表する俳人の素史とその師匠青々の句碑も残されている。禅宗寺院としての宝慶寺との関係、白山信仰の拠点としての平泉寺との関係がどうであったのか、仏母寺にはわからない点があまりにも多く残されている。